2023年度　入学試験　国語　問題冊子

早稲田大学系属　早稲田渋谷シンガポール校

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、下記の注意事項をよく読んでください。

注 意 事 項

１．問題は、本冊子のｐ．１～ｐ．３１となります。
２．解答は、別紙の解答用紙に記入してください。
３．「始め」の合図があるまで、問題冊子、解答用紙を開かないでください。
４．監督者が「始め」の合図をしてから、問題冊子と解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
５．解答中に何か用事がある場合は、黙って手をあげてください。
６．解答中に問題冊子や解答用紙の汚れ、印刷の不鮮明な箇所に気付いた場合は、黙って手をあげ監督者に申し出てください。
７．「止め」の合図で筆記用具を置き、監督者の指示に従って解答用紙の回収を待ってください。
８.問題冊子も回収します。持ち帰らないでください。

※　解答上の注意
文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさで・濃く）記しなさい。
字画（漢字を構成する点や線）が認められない場合には、不正解または減点の対象になります。

受験番号							氏名

2023　I

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

* *

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

だいぶ前に、農学専門のある先生から興味深い話を聞いたことがある。

その先生が留学していた頃、アメリカで人間の動物観を研究するというプロジェクトがあった。そのやり方は、例えば「一番美しい動物は何か」といったような質問を並べてアンケート調査を重ね、その答えが年齢、性別、職業、宗教、民族などでどのように違うか調べるのだという。

このことを聞いて、それは面白そうだから日本でも同じような調査をしようという話になった。うまく行けば日米比較文化論になるかもしれない。というわけでさっそく試みたのだが、これがどうもうまく行かない。アメリカでなら「一番美しい動物は」ときけば、すぐ「馬」とか「ライオン」とか、何か答えが返って来る。ところが同じ質問を日本人にすると、「さあ、何だろうな」とはなはだ歯切れが悪い。そこを無理に、何でも一番美しいと思うものを　a　アげてほしいと言うと、「そうだなあ、夕焼けの空に小鳥たちがぱあっと飛び立っているところかな」といったような答えになる。「これでは比較は無理だから、結局諦めました」とその先生は苦笑していた。

私がこの話を聞いて興味深いと思ったのは、それが動物観の差異以上に、日本人とアメリカ人の美意識の違いをよく示すものと思われたからである。

アメリカも含めて、西欧世界においては、古代ギリシャ以来、「美」はある明確な秩序を持ったもののなかに表現されるという考え方が強い。その秩序とは、左右相称性であったり、部分と全体との比例関係であったり、　A　基本的な幾何学形態との類縁性など、内容はさまざまであるが、いずれにしても客観的な原理に基づく秩序が美を生み出すという点においては一　b　カンしている。

逆に言えば、1 そのような原理に基づいて作品を制作すれば、それは「美」を表現したものとなる。

典型的な例は、現在でもしばしば話題となる八頭身の美学であろう。人間の頭部と身長が一対八の比例関係にあるとき最も美しいという考え方は、紀元前四世紀のギリシャにおいて成立した美の原理である。ギリシャ人たちは、このような原理を「カノン（規準）」と呼んだ。「カノン」の中身は場合によっては変わり得る。現に紀元前五世紀においては、優美な八頭身よりも荘重な七頭身が規準とされた。だが七頭身にせよ八頭身にせよ、何かある原理が美を生み出すという思想は変わらない。ギリシャ彫刻の持つ魅力は、この美学に c ユ来するところが大きい。

B 、この時期の彫刻作品はほとんど失われてしまって残っていない。残されたのは大部分ローマ時代のコピーである。しかししばしば不完全なそれらの模刻作品を通して、かなりの程度まで原作の姿をうかがうことができるのは、美の原理である「カノン」がそこに実現されているからにほかならない。原理に基づいて制作されている以上、彫刻作品そのものがまさしく「美」を表すものとなるのである。

だがこのような実体物として美を捉えるという考え方は、日本人の美意識のなかではそれほど大きな場所を占めているようには思われない。日本人は、遠い昔から、何が美であるかということよりも、 C どのような場合に美が生まれるかということにその感性を働かせて来たようである。それは「実体の美」に対して、「状況の美」とでも呼んだらよいであろうか。

D 、「古池や蛙飛びこむ水の音」という一句は、「古池」や「蛙」が美しいと言っているわけではなく、もちろん「水の音」が妙音だと主張しているのでもない。ただ（ X ）に芭蕉はそれまでにない新しい美を見出した。そこには何の実体物もなく、あるのはただ状況だけなのである。

日本人のこのような美意識を最もよく示す例の一つは、「春は曙、やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて……」という文

章で知られる『枕草子』冒頭の段であろう。これは春夏秋冬それぞれの季節の最も美しい姿を鋭敏な感覚で捉えた、いわば模範的な「状況の美」の世界である。すなわち春ならば夜明け、夏は夜、そして秋は夕暮というわけだが、その秋について、清少納言は次のように述べている。

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるは、いとをかし……。

これはまさしく「夕焼けの空に小鳥たちがぱあっと飛び立っているところ」というあの現代人の美意識にそのままつながる感覚と言ってよいであろう。日本人の感性は、2千年の時を隔ててもなお変わらずに生き続けている。

「実体の美」は、そのもの自体が美を表わしているのだから、状況がどう変わろうと、いつでも、どこでも「美」はあり得る。《ミロのヴィーナス》は、紀元前一世紀にギリシャの植民地であった地中海のある島で造られたが、二一世紀の今日、パリのルーヴル美術館に並べられていてもその美しさに変わりはない。仮に砂漠のなかにぽつんと置かれても、同じように「美」を主張するであろう。だが「状況の美」は、状況が変われば当然消えてしまう。春の曙や秋の夕暮れの美しさは、長くは続かない。状況の美に敏感に反応する日本人は、それゆえにまた、美とはうつろいやすいもの、はかないものという感覚を育てて来た。うつろいやすいものであるがゆえに、いっそう貴重で、いっそう愛すべきものという感覚である。日本人が、春の花見、秋の月見などの季節ごとの美の鑑賞を、年中行事として特に好んで今でも繰り返しているのも、そのためであろう。

実際、清少納言が　d　テキ確に見抜いたように、日本人にとっての美とは、季節の移り変わりや時間の流れなど、自然の営みと密

接に結びついている。そのことは江戸期に広く一般大衆のあいだで好まれた各地の名所絵を見てみればよくわかる。

名所絵とは、文字通りそれぞれの土地において見るべき場所、訪れる価値のある所を描き出したものだが、単なる場所ではない。例えば、広重の晩年の名作《名所江戸百景》を見てみると、雪晴れの日本橋とか、花の飛鳥山など、季節ごとの自然と一つになった情景が描き出されている。事実この連作シリーズは、まとまったかたちとしては、春夏秋冬の四部に分類されている。しかしそのように分類したのは広重ではない。広重は、江戸のなかの見るべき場所を、特に順序立てずに、いわば思いつくままばらばらに描き出して行った。それが好評であったので、次々と続けて、百十八点まで描いたところで彼は世を去った。その後版元が、別の画家に追加分を一点と扉絵の制作を e イ頼し、あわせて計百二十点の「揃物（そろいもの）」として刊行したが、そのときに内容を四季に分類したのである。ということは、当初ばらばらに描いた「名所」が、いずれも季節の風物や年中行事と結びついていたので、自ずから分類が成り立ったということである。 E 名所そのものが、江戸の町と自然との結びつきによって生まれて来たのである。

かつての名所絵がそうであったように、今日でも人々は、旅をするとその記念や土産ものとして、土地の観光絵葉書を買い求める。パリやローマに行くと、土産物屋の店先にさまざまの絵葉書が並んでいるが、そのほとんどは、ノートルダム大聖堂とか、凱旋門とか、エッフェル塔など、代表的なモニュメントをそのまま捉えたものである。だが日本の観光絵葉書を見てみると、満開の桜の下の清水寺とか、雪に覆われた金閣寺など、季節の粧（よそお）いをこらしたものが圧倒的に多い。もちろん、清水寺も金閣寺も、それ自体見事な建築だが、観光写真はそこに自然の変化を組み合わせることを好むのである。それもまた、「状況の美」を愛する日本人の美意識の表れであろうか。

（高階秀爾「実体の美と状況の美」による）

問一　二重線部a「ア（げ）」・b「（一）カン」・c「ユ（来）」・d「テキ（確）」・e「イ（頼）」について、同じ漢字を用いるものとして正しいものを、次の各群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a　**ア**げ

ア　来年の正月は広い河原で、凧（たこ）**ア**げに挑戦しよう。
イ　インターネットに、旅先で撮った写真を**ア**げる。
ウ　地域振興のため、町を**ア**げて招致活動をする。
エ　コンビニで、から**ア**げ弁当を買って食べる。
オ　新商品の評判がよく、前年より利益を**ア**げられた。

b　一**カン**

ア　酸化鉄を、炭素を用いることで**カン**元する。
イ　昼夜を問わない突**カン**工事で完成させた。
ウ　子供のころから、昆虫の生態に**カン**心がある。
エ　人気アニメの着ぐるみを、子供たちが大きな**カン**声で迎える。
オ　学校の授業で、現代の**カン**境問題について調べた。

c

ユ来

ア 円安で、**ユ**入雑貨の値段が高騰した。
イ 真っ白な壁に、**ユ**性の塗料で絵を描く。
ウ 抽象的な概念を、比**ユ**を用いて説明する。
エ 貴重な資源を、考えなしに**ユ**水のように消費する。
オ 複数の国を経**ユ**して、やっと帰国できた。

d

テキ確

ア 複雑な内容を、端**テキ**に説明することができた。
イ 外科医が患部の**テキ**出手術を行う。
ウ 遠くから、汽**テキ**の音が響いてくる。
エ 彼に匹**テキ**する選手は、もう現れないだろう。
オ 優雅で快**テキ**な暮らしを満喫する。

e

イ頼

ア 大学では、近代**イ**降の文学を専攻する。
イ **イ**匠を凝らしたレリーフを柱に施す。
ウ 聖徳太子が冠**イ**十二階を定めた。
エ 鉄道の発明によって、旅が容**イ**になった。
オ 旧態**イ**然とした体制を改革する。

問二　空欄 A ～ E を補うのに最も適当な語句を、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ語を繰り返し用いてはならない。

ア　つまり　　イ　あるいは　　ウ　むしろ　　エ　もっとも　　オ　例えば　　カ　もしかすると

問三　傍線部1「そのような原理に基づいて作品を制作すれば、それは『美』を表現したものとなる」とあるが、ここでいう「『美』」になりうるものの例として**不適当なもの**を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　和声的に調和のとれた、混声四部合唱の曲。
イ　ろくろを用いて制作され均整の取れた、無地の白磁の壺。
ウ　古代エジプトの幾何学の知識に基づき作られた、巨大なピラミッド。
エ　均一に胸の高さに刈り揃えられた、庭を囲むつつじの生垣。
オ　一輪の朝顔を挿して茶室に飾られた、竹を削って作った花入れ。

問四　空欄（　X　）に当てはまる文として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　蛙が古池に身を投じた際、期せずして絶妙に響き渡った水音

イ　水音を響かせて勢いよく古池に飛び込んで見せた躍動感あふれる蛙の姿

ウ　鏡のような水面に飛びこんだ蛙を中心に、均一な同心円状に拡がった波の形

エ　古い池に蛙が飛びこんだその一瞬、そこに生じる緊張感を孕んだ深い静寂の世界

オ　醜い蛙が水中に身を沈めたことで、ただ美的に価値あるものだけが残った庭の景色

問五　傍線部2「千年の時を隔ててもなお変わらずに生き続けている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　『枕草子』で清少納言が述べた、秋の夕暮れ時に烏や雁が飛んでいる様を愛でる日本人的な感性は、筆者が知人に聞いたアンケート調査から考察した現代人の美意識と、時代の隔たりがあっても大いに通じる部分があるということ。

イ　『枕草子』の冒頭に記された、春の夜明けが徐々に明るむ様を捉えた清少納言の鋭敏な感覚は、筆者の知人のアンケート調査によれば、遥か年月を経た現代でも、夕焼けの空に飛ぶ小鳥を愛でる人々が受け継いでいるということ。

ウ　『枕草子』で描写された春夏秋冬の美しい光景は、当時は清少納言にしか見出せない大きな発見であったが、遥か後世の現代人は、何ら特別なことではなく四季を味わうのだと、筆者の知人のアンケート調査でわかったということ。

エ　『枕草子』を記した清少納言の鋭い感性は、秋という季節に潜んでいた夕暮れ時の趣深さを世間に浸透させたが、筆者の知人のアンケート調査を踏まえれば、時を経た現代人にもいまだに好まれていることが判明したということ。

オ　『枕草子』に記された、春夏秋冬の特定の時間帯を好んで鑑賞する清少納言の姿勢は、日本人の美意識の模範と言えるものであり、時は流れ現代でも尊敬の対象となっていることが筆者の知人のアンケート調査でわかったということ。

問六　波線部「日本人とアメリカ人の美意識の違い」とあるが、両者の美意識の違いを七十字以内で説明しなさい。

〈下書き用〉

二　次の文章は、岡本かの子「鮨」の一節である。鮨屋の娘であるともよは、女学校を卒業した後、両親の営む店を手伝っていた。これを読んで、後の問いに答えなさい。

店へ来る客は十人十色だが、全体については共通するものがあった。

後からも前からもぎりぎりに生活の現実に詰め寄られている、その間をぽっと外ずして気分を転換したい。

一つ一つ我ままがきいて、ちんまりした贅沢ができて、そして、ここへ来ている間は、くだらなくばかになれる。好みの程度に自分から裸になれたり、仮装したり出来る。たとえ、そこで、どんな安ちょくなことをしても云っても、誰も軽蔑するものがない。お互いに現実から隠れんぼうをしているような者同士の一種の親しさ、そして、かばい合うようなa懇な眼ざしで鮨をつまむ手つきや茶を呑む様子を視合ったりする。かとおもうとまたそれは人間というより木石の如く、はたの神経とはまったく無交渉な様子で黙々といくつかの鮨をつまんで、さっさと帰って行く客もある。

客のなかの湊というのは、五十過ぎぐらいの紳士で、濃い眉がしらから顔へかけて、憂愁の蔭を帯びている。時によっては、もっと老けて見え、場合によっては情熱的な壮年者にも見えるときもあった。けれども鋭い理智から来る一種の諦念といったようなものが、人柄の上に冴えて、苦味のある顔を柔和に磨いていた。

濃く縮れた髪の毛を、程よくもじょもじょに分け仏蘭西髭を生やしている。服装は赤い短靴を埃まみれにしてホームスパンを着ている時もあれば、少し古びた結城で着流しのときもある。独身者であることはたしかだが職業は誰にも判らず、店ではいつか先生と呼び馴れていた。鮨の喰べ方は巧者であるが、強いて通がるところも無かった。

ともよは、初めは少し窮屈な客と思っていただけだったが、だんだんこの客の謎めいた眼の遣り所に見慣れると、お茶を運んで行ったときから鮨を喰い終るまで、よそばかり眺めていて、一度もその眼を自分の方に振向けないときは、物足りなく思うようになった。そうかといって、どうかして、まともにその眼を振向けられ自分の眼と永く視線を合せていると、自分を支えている力を暈されて危いような気がした。

偶然のように顔を見合して、ただ一通りの好感を寄せる程度で、微笑してくれるときはともよは父母とは違って、自分をほぐしてくれるなにか暖昧のある刺戟のような感じをこの年とった客からうけた。だからともよは湊がいつまでもよそばかり見ているときは土間の隅の湯沸しの前で、絽ざしの手をとめて、たとえば、作り咳をするとか耳に立つものの音をたてるかして、自分ながらしらずしらず湊の注意を自分に振り向ける所作をした。すると湊は、ぴくりとして、ともよの方を見て、微笑する。上歯と下歯がきっちり合い、引緊って見える口の線が、滑らかになり、仏蘭西髭の片端が目についてあがる――父親は鮨を握りながらちょっと眼を挙げる。ともよのいたずら気とばかり思い、また無愛想な顔をして仕事に向う。

湊はこの店へ来る常連とは分け隔てなく話す。競馬の話、株の話、時局の話、碁、将棋の話、盆栽の話――大体こういう場所の客の間に交される話題に洩れないものだが、湊は、八分は相手に話さして、二分だけ自分が口を開くのだけれども、その寡黙は相手を見下げているのでもなく、つまらないのを我慢しているのでもない。その証拠には、盃の一つもさされると

「いやどうも、僕は身体を壊していて、酒はすっかりとめられているのですが、せっかくですから、じゃ、まあ、頂きましょうかな」

といって、細いがっしりとしている手を、何度も振って、さも敬意を表するように鮮やかに盃を受取り、気持ちよく飲んでまた盃を返す。そして徳利を器用に持上げて酌をしてやる。その挙動の間に、いかにも人なつこく他人の好意に対しては、何倍にかして返さなくては気が済まない性分が現われているので、常連の間で、先生は好い人だということになっていた。

1

ともよは、こういう湊を見るのは、あまり好かなかった。あの人にしては軽すぎるというような態度だと思った。

ある日、ともよは買い物に出かけた先で、偶然湊と遭遇した。

二人は、歩きながら、互いの買いものを見せ合った。湊は西洋の鑑賞魚の髑髏魚（ゴーストフィッシュ）を買っていた。それは骨が寒天のような肉に透き通って、腸（はらわた）が鰓（えら）の下に小さくこみ上っていた。

「先生のおうち、この近所」

「いまは、この先のアパートにいる。だが、いつ越すかわからないよ」

ともよは何を云おうかとしばらく考えていたが、大したおもいつきでも無いようなことを、とうとう云い出した。

「あなた、お鮨、本当にお好きなの」

「さあ」

「じゃ何故（なぜ）来て食べるの」

2

「好きでないことはないさ、けど、さほど喰べたくない時でも、鮨を喰べるということが僕の慰みになるんだよ」

「なぜ」

何故、湊が、さほど鮨を喰べたくない時でも鮨を喰べるというその事だけが湊の慰めとなるかを話し出した。

――旧（ふる）くなって潰れるような家には妙な子供が生れるというものか、大きな家の潰れるときというものは、大人より子供にその脅（おび）えが予感されるというものか、それが激しく来ると、子は母の胎内にいるときから、そんな脅えに命を蝕（むしば）まれているのかもしれな

いね――というような言葉を冒頭に湊は語り出した。

その子供は小さいときから甘いものを好まなかった。おやつにはせいぜい塩煎餅ぐらいを望んだ。食べるときは、上歯と下歯を叮嚀に揃え円い形の煎餅の端を規則正しく噛み取った。ひどく湿っていない煎餅なら大概好い音がした。子供は噛み取った煎餅の破片をじゅうぶんに咀嚼して咽喉へきれいに嚥み下してから次の端を噛み取ることにかかる。上歯と下歯をまた叮嚀に揃え、その間へまた煎餅の次の端を挟み入れる――いざ、噛み取るときに子供は眼を薄く瞑り耳を澄ます。

ぺちん

同じ、ぺちんという音にも、いろいろの性質があった。子供は聞き慣れてその音の種類を聞き分けた。

ある一定の調子の響きを聞き当てたとき、子供はぷるぷると胴慄いした。子供は煎餅を持った手を控えて、しばらく考え込む。うっすら眼に涙を溜めている。

家族は両親と、兄と姉と召使いだけだった。家中で、おかしな子供と云われていた。その子供の喰べものは外にまだ偏っていた。さかなが嫌いだった。あまり数の野菜は好かなかった。肉類は絶対に近づけなかった。

その子供には、実際、食事が苦痛だった。体内へ、色、香、味のある塊団を入れると、何か身が穢れるような気がした。空気のような喰べものは無いかと思う。腹が減ると饑えは充分感じるのだが、うっかり喰べる気はしなかった。床の間の冷たく透き通った水晶の置きものに、舌を当てたり、頬をつけたりした。饑えぬいて、頭の中が澄み切ったまま、だんだん、気が遠くなって行く。それが谷地の池水を距ててA―丘の後へ入りかける夕陽を眺めているときででもあると（湊の生れた家もこの辺の地勢に似た都会の一隅にあった。）子どもはこのままのめり倒れて死んでも関わないとさえ思う。だが、この場合は窪んだ腹に緊く締めつけてある帯の間に両手を無理にさし込み、体は前のめりのまま首だけ仰のいて

「お母さあん」

と呼ぶ。子供の呼んだのは、現在の生みの母のことではなかった。子供は現在の生みの母は家族じゅうで一番好きである。けれども子供にはまだ他に自分に「お母さん」と呼ばれる女性があって、どこかに居そうな気がした。自分がいま呼んで、もし「はい」といってその女性が眼の前に出て来たなら自分はびっくりして気絶してしまうに違いないとは思う。しかし呼ぶことだけは悲しい楽しさだった。

その翌日であった。母親は青葉の映りの濃く射す縁側へ新しい莫蓙を敷き、俎板だの庖丁だの水桶だの蝿帳だの持ち出した。それもみな買い立ての真新しいものだった。

母親は自分と俎板を距てた向側に子供を坐らせた。子供の前には膳の上に一つの皿を置いた。

母親は、腕捲りして、薔薇いろの掌を差出して手品師のように、手の裏表を返して子供に見せた。

それからその手を言葉と共に調子づけて擦りながら云った。

「よくご覧、使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵える人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ。判ったかい。判ったら、さ、そこで――」

母親は、鉢の中で炊きさました飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんこん噎せた。それから母親はその鉢を傍に寄せて、中からいくらかの飯の分量を掴み出して、両手で小さく長方形に握った。

蝿帳の中には、すでに鮨の具が調理されてあった。母親は素早くその中からひときれを取出してそれからちょっと押えて、長方形に握った飯の上へ載せた。子供の前の膳の上の皿へ置いた。玉子焼鮨だった。

「ほら、鮨だよ、おすしだよ。手々で、じかに摑んで喰べても好いのだよ」

子供は、その通りにした。はだかの肌をするする撫でられようなころ合いの酸味に、飯と、玉子のあまみがほろほろに交ったあじわいが丁度舌いっぱいに乗った具合――それをひとつ喰べてしまうと体を母に抛りつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身うちに湧いた。

子供はおいしいと云うのが、きまり悪いので、ただ、にいっと笑って、母の顔を見上げた。

「そら、もひとつ、いいかね」

母親は、また手品師のように、手をうら返しにして見せた後、飯を握り、蝿帳から具の一片を取りだして押しつけ、子供の皿に置いた。

子供は今度は握った飯の上に乗った白く長方形の切片を気味悪く覗いた。すると母親は怖くない程度の b 居丈高になって、

「何でもありません、白い玉子焼だと思って喰べればいいんです」

といった。

かくて、子供は、烏賊というものを生まれて始めて喰べた。象牙のような滑らかさがあって、生餅より、よっぽど歯切れがよかった。子供は烏賊鮨を喰べていたその冒険のさなか、詰めていた息のようなものを、はっ、として顔の力みを解いた。うまかったことは、笑い顔でしか現わさなかった。

母親は、こんどは、飯の上に、白い透きとおる切片をつけて出した。子供は、それを取って口へ持って行くときに、脅かされるにおいに掠められたが、鼻を詰らせて、思い切って口の中へ入れた。

白く透き通る切片は、咀嚼のために、上品なうま味に衝きくずされ、程よい滋味の圧感に混って、子供の細い咽喉へ通って行った。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が喰べられたのだ――」

そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したような征服と新鮮を感じ、あたりを広く見廻したい歓(よろこ)びを感じた。むずむずする両方の脇腹を、同じような歓びで、じっとしていられない手の指で摑み掻(か)いた。

「ひ　ひ　ひ　ひ　ひ」

無暗(むやみ)に疳高(かんだか)に子供は笑った。母親は、勝利は自分のものだと見てとると、指についた飯粒を、ひとつひとつ払い落したりしてから、わざと落ちついて蝿帳のなかを子供に見せぬよう覗いて云った。

「さあ、こんどは、何にしようかね……はてね……まだあるかしらん……」

子供は苛立って絶叫する。

「すし！すし！」

母親は、嬉(うれ)しいのをぐっと堪(こら)える少し呆(ほう)けたような――それは子供が、母としては一ばん好きな表情で、3 生涯忘れ得ない美しい顔をして

「では、お客様のお好みによりまして、次を差上げまあす」

最初のときのように、薔薇いろの手を子供の目の前に近づけ、母はまたも手品師のように裏と表を返して見せてから鮨を握り出した。同じような白い身の魚の鮨が握り出された。

母親はまず最初の試みに注意深く色と生臭の無い魚肉を選んだらしい。それは鯛と比良目(ひらめ)であった。

子供は続けて喰べた。母親が握って皿の上に置くのと、子供が摑み取る手と、競争するようになった。その熱中が、母と子を何も考えず、意識しない一つの気持ちの痺(しび)れた世界に牽(ひ)き入れた。五つ六つの鮨が握られて、摑み取られて、喰べられる――その運びに面白く調子がついて来た。素人の母親の握る鮨は、いちいち大きさが違っていて、形も不細工だった。鮨は、皿の上に、ころりと倒

れて、載せた具を傍へ落すものもあった。子供は、そういうものへかえって愛感を覚え、自分で形を調えて喰べると余計おいしい気がした。子供は、ふと、日頃、内しょで呼んでいるも一人の幻想のなかの母といま目の前に鮨を握っている母とが眼の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。もっと、ぴったり、一致して欲しいが、あまり一致したら恐ろしい気もする。

自分が、いつも、誰にも内しょで呼ぶ母はやはり、この母親であったのかしら、それがこんなにも自分においしいものを食べさせてくれるこの母であったのなら、内密に心を外の母に移していたのが悪かった気がした。

「さあ、さあ、今日は、この位にして置きましょう。よく喰べておくれだったね」

目の前の母親は、飯粒のついた薔薇いろの手をぱんぱんと子供の前で気もちよさそうにはたいた。

それから後も五、六度、母親の手製の鮨に子供は慣らされて行った。

ざくろの花のような色の赤貝の身だの、二本の銀色の地色に竪縞(たてじま)のあるさより、だのに、子供は馴染むようになった。子供はそれから、だんだん平常の飯の菜にも魚が喰べられるようになった。身体も見違えるほど健康になった。中学へはいる頃は、人が振り返るほど美しく逞しい少年になった。

息子には学校へ行っても、学課が見通せて判り切っているように思えた。中学でも彼は勉強もしないでよく出来た。高等学校から大学へ苦もなく進めた。それでいて、何かしら体のうちに切ないものがあって、それを晴らす方法は急いで求めてもなかなか見付からないように感ぜられた。永い憂鬱と退屈あそびのなかから大学も出、職も得た。

家は全く潰れ、父母や兄姉も前後して死んだ。息子自身は頭が好くて、どこへ行っても相当に用いられたが、何故か、一家の職にも、栄達にも気が進まなかった。二度目の妻が死んで、五十近くなった時、ちょっとした投機でかなり儲(もう)け、一生独りの生活には事かかない見極めのついたのを機に職業も捨てた。それから後は、ここのアパート、あちらの貸家と、彼の一所不定の生活が始まった。

今のはなしのうちの子供、それから大きくなって息子と呼んではなしたのは私のことだと湊は長い談話のあとで、ともよに云った。

「ああ判った。それで先生は鮨がお好きなのね」

「いや、大人になってからは、そんなに好きでもなくなったのだが、近頃、年をとったせいか、しきりに母親のことを思い出すのでね。鮨まで懐かしくなるんだよ」

二人の坐っている病院の焼跡のひとところに支えの朽ちた藤棚があって、おどろのように藤蔓が宙から地上に這い下り、それでも蔓の尖の方には若葉をいっぱいつけ、その間から痩せたうす紫の花房が雫のように咲き垂れている。庭石の根締めになっていたやしおの躑躅が石を運び去られたあとの穴の側に半面、黝く枯れて火のあおりのあとを残しながら、半面に白い花をつけている。

庭の端の崖下は電車線路になっていて、ときどき轟々と電車の行き過ぎる音だけが聞える。

竜の髭のなかのいちはつの花の紫が、夕風に揺れ、二人のいる近くに一本立っている太い棕梠の木の影が、草叢の上にだんだん斜にかかって来た。ともよが買って来てそこへ置いた籠の河鹿が二声、三声、啼き初めた。

4 二人は笑いを含んだ顔を見合せた。

「さあ、だいぶ遅くなった。ともちゃん、帰らなくては悪かろう」

ともよは河鹿の籠を捧げて立ち上った。すると、湊は自分の買った骨の透き通って見える髑髏魚をも、そのままともよに与えて立ち去った。

湊はその後、すこしも福ずしに姿を見せなくなった。

「先生は、近頃、さっぱり姿を見せないね」

常連の間に不審がるものもあったが、やがてすっかり忘られてしまった。

ともよは湊と別れるとき、湊がどこのアパートにいるか聞きもらしたのが残念だった。それで、こちらから訪ねても行けず病院の焼跡へしばらく佇(たたず)んだり、あたりを見廻しながら石に腰かけて湊のことを考え時々は眼にうすく涙さえためてまた茫然として店へ帰って来るのであったが、やがてともよのそうした行為も止んでしまった。

この頃では、ともよは湊を思い出す度(たび)に

「先生は、どこかへ越して、またどこかの鮨屋へ行ってらっしゃるのだろう――鮨屋はどこにでもあるんだもの――」

と漠然と考えるに過ぎなくなった。

（岡本かの子「鮨」による）

問一　二重線部a「懇(ねんごろ)な」・b「居丈高(いたけだか)になって」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群のア～オの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a　懇(ねんごろ)な

ア　素直な
イ　大げさな
ウ　ありきたりな
エ　親密な
オ　真剣な

b　居丈高(いたけだか)になって

ア　強い調子で
イ　ふざけた感じで
ウ　意地悪そうな顔で
エ　不機嫌な様子で
オ　卑屈な態度で

問二　傍線部1「ともよは、こういう湊を見るのは、あまり好かなかった」とあるが、それはなぜか。「理想」という語を必ず用いて、次の形式に合うように、四十字以内（句読点等を含む）で説明しなさい。

湊に不思議な魅力を感じていたともよにとっては、□から。

〈下書き用〉

問三　傍線部2「好きでないことはないさ、けど、さほど喰べたくない時でも、鮨を喰べるということが僕の慰みになるんだよ」とあるが、「慰みになる」とはどのようなことを言うのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　独り身の埋めようのない寂しさを紛らわせられること。
イ　自分に好意を寄せるともよに会うための口実を得られること。
ウ　没落した家系に生まれた運命への恨みを忘れられること。
エ　離別や死別を経て辛い思いをさせた妻たちに償えること。
オ　今は亡き母親から愛されていたという思い出に浸れること。

問四　傍線部3「生涯忘れ得ない美しい顔をして」とあるが、「生涯忘れ得ない」と言うのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　家の没落の予感に生命を蝕(むしば)まれたためか、拒食という形で自らの家族を否定していた自分が、生きているものを食べられたことにより、両親や兄弟への愛情を深め、自らの家族を肯定する転機となった出来事だったから。

イ　幻想の母親をつくり出すことで、食事の苦痛や家族からの疎外感に対する癒やしを得ていた自分が、真心のこもった生みの母親の手作りの鮨を食べたことによって、幻想の母親から解放された出来事だったから。

ウ　家族から変わった子供として見られ、疎外感を抱いていた自分が、母親の創意工夫を凝らした鮨によって偏食を克服し、真の安らぎを得た出来事だったから。

エ　偏食の責任を生みの母親のせいにするために、幻想の母親を意識的につくり出していた自分が、初めて生みの母親の愛情を実感できた出来事だったから。

オ　家の没落の予感に蝕(むしば)まれ、生への諦めが生じていたためか、誰も心から愛することができなかった自分が、母と一体になった痺(しび)れる世界の中で、人を心から愛することができるようになる転機となる出来事だったから。

問五　傍線部４「二人は笑いを含んだ顔を見合せた」とあるが、ここでの「二人」についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　湊の話を聞いて鮨屋に通う真意も含めて色々と知ったつもりになり、互いの距離が縮まったことを喜ぶともよに対して、とうとう別れの時機が訪れたことを察した湊は、優しく振る舞いつつ別れの切り出し方をうかがっている。

イ　湊の鮨に対する思いを尋ねたともよは、自身の発言によって湊の過去を露見させてしまったのではないかと悔やんでいるのに対して、語り得なかった思い出話を自然と引き出してもらった湊は、ともよに深く感謝している。

ウ　湊の幼少期の困難は鮨によって乗り越えられたと知り、鮨屋の娘として誇らしい思いになっているともよに対して、今は鮨が好きなわけではないという真意を伝えきれなかった湊は、ともよの純粋すぎる幼さに苦々しさを覚えている。

エ　湊の過去を知ったともよは、自宅の鮨屋が湊が母親を思い出すための場となっていることに大きな喜びを感じているのに対して、自らが欲しているのは鮨ではなく母親との思い出だと気づいた湊は、ともよとの別れを予感している。

オ　湊の母親との思い出話を聞き、湊と特別な関係になれたように感じて舞い上がるともよに対して、自らの過ちを洗いざらい語ることになった湊は、もはやともよと過ごす時間に居心地の悪さを感じ、苦笑いでその場を取り繕っている。

問六　本文の内容と表現に関する説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　本文では、ともよと湊との出会い、湊がともよのもとを去るまでの出来事が、時間の流れに従って叙述されており、様々な人々が行き交う「鮨屋」は二人の思いがすれ違う場所として描かれている。

イ　本文では、主人公であるともよが、少女から大人へと精神的に成長していく様子が、両親や湊との交流を通して描かれている。

ウ　本文では、人々が、思うままに自分を見せながら心地良く付き合い、様々な立場や境遇の人が、程良く身を寄せ合う様子を通して、出会いと別れの場としての「鮨屋」のありようが描かれている。

エ　本文では、ともよのもとに残された「髑髏魚」は、ともよに自らの生い立ちを打ち明けたいというかねてからの願望や、ともよのもとを去る覚悟という湊の内面の隠喩として用いられている。

オ　本文では、ともよと湊、それぞれの視点に寄り添いながらその内面が語られており、それによって、お互いに対する心情の変化が明示的に描かれている。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

下野の国に、安蘇沼といふ所に、常に殺生をし、鷹を使ひける俗人あり。ある時、（注1）鴛の雄を取りて、餌袋に入れて帰りにけり。1その夢に、実に尋常なる女房の、装束もやさしき体にて恨み深き気色にて、さめざめと泣きて、「いかに、うたてく、2わが夫をば殺させ給ひたる」といふ。夢の中に、「さる事こそ覚え侍らね」といふ。「たしかに今日、召し取りておはするものを」といふ。3かたく論じければ、この女人、

日暮るればいさやといひしあそ沼のまこも隠れに独りかも寝む

といひて、ふわふわと飛びて帰るを見れば、鴛の雌なりけり。うち驚きて、4あさましくおぼえけるほどに、発心して、永く［X］をとどめて、やがて入道になりて、（注2）後世菩提、勤行しけりとぞうけたまはる。あはれなる出家の因縁にこそ。

（無住道暁『沙石集』による）

［注］　1　鴛――おしどり。水辺に生息するカモ科の鳥。

2　後世菩提――来世での幸福を仏に祈ること。

問一　二重線部「うけたまはる」を、現代仮名遣いに改めなさい。

問二　傍線部1「その夢」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　狩の最中に安蘇沼で美しい女性と出会い夫婦になったという、俗人の夢。
イ　鷹を使って獲物をたくさん捕まえ、袋の中に詰め込んだという、俗人の夢。
ウ　優雅な衣装を着た女性に、泣きながら声をかけられたという、俗人の夢。
エ　見た目の美しい狩人と出会い、共に暮らすようになったという、女房の夢。
オ　なかなか帰ってこない夫を恨み、一人で泣き続けているという、女房の夢。

問三　傍線部2「わが夫」を言い換えた言葉として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　鴛の雄
イ　鷹を使ひける俗人
ウ　尋常なる女房
エ　この女人
オ　鴛の雌

問四　傍線部3「かたく論じけれ」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　俗人が、他人の女房を見初めたりなどしないと、男に強く言い聞かせたということ。

イ　俗人が、女房を悲しませてしまったことについて、深く反省したということ。

ウ　俗人が、美しい女性を自分の女房にしたい一心で、相手の夫を説き伏せたということ。

エ　俗人が、見知らぬ女房の夫を殺した覚えなどないと、かたくなに言い張ったということ。

オ　俗人が、知らない女性に声をかけられて、どう答えていいか迷っていたということ。

問五　「日暮るれば…」の和歌に込められた詠み手の心情の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　鷹狩りに出たまま戻ってこない夫の無事を祈っている。
イ　最愛の夫を失い、孤独に生きていく我が身を嘆いている。
ウ　たった一人の愛する我が子を殺されたことを恨んでいる。
エ　夫を失い、自分一人で子供を育てていくことに不安を感じている。
オ　夜になり、あそ沼から女房の霊が現われはしないかと恐れている。

問六　傍線部4「あさましくおぼえける」の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　美しい女性の詠んだ和歌に感動した俗人が、狩りをやめて雅びな生き方をしようと思っている。

イ　突然飛び去った女性が鴛だったと気づいた俗人が、鴛を捕らえる機会を逃したことを残念に思っている。

ウ　人の言葉を話す鴛が恐ろしくて逃げ帰った俗人が、己の心の弱さを振り返り情けなく思っている。

エ　自分の元に現われた女性が、狩りで殺した鴛の妻だと悟った俗人が、申し訳なく思っている。

オ　鴛の雌が詠んだ求愛の和歌を聞いた俗人が、鳥などとは結婚できないと思っている。

問七　空欄 X にあてはまる漢字二字を、文中から抜き出しなさい。

二〇二三年度　入学試験　国語　解答用紙

早稲田大学系属　早稲田渋谷シンガポール校

受験番号						

氏名

得点

一

問一 a

b

c

d

e

問二 A

B

C

D

E

問三

問四

問五

問六

二

問一 a

b

問二

湊に不思議な魅力を感じていたとも、よにとっては、

から。

問三

問四

問五

問六

三

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七